



学びをつなぐ力を高める授業 <3年次研究> —「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けの開発—

新潟大学教育学部附属新潟小学校
研究主任 山田 耕 世

1. 目指す子どもの姿

(1) 社会的な背景から

今後子どもたちが生きる社会はますます変化の激しい社会になると言われています。このような社会を生き抜くためには、多様な情報から必要な情報を主体的に判断し、獲得した知識や技能を活用していく力が重要です。

(2) 目の前の子どもの実態から

日々の授業や全国学力・学習状況調査のB問題の結果をとおして、多様な情報から必要な情報を判断する問題に関して、獲得した知識や技能を活用することが困難な子どもの姿が明らかになりました。

この原因を次のように考えました。

【原因1】

知識や技能を個別的に子どもに獲得させてきたのではないか。

【原因2】

多様な情報から必要な情報を収集・判断するための思考力を育成できていなかったのではないか。

これらの原因に対して、改善策を次のように考えました。

【原因1に対する改善策】

各単元の本質となる知識や技能を「中核的な知識や技能」と設定する。そして、活用できる知識や技能となるために、既存の知識や技能とつなげながら「中核的な知識や技能」を獲得させる。

【原因2に対する改善策】

既存の知識や技能を基に、必要な情報を収

集・判断する力を「学びをつなぐ力」と設定する。「学びをつなぐ力」は、比較や関係付けなどの基本的な思考の方法（考えるすべ）から構成されている汎用的な思考力である。「学びをつなぐ力」の有用性を自覚させることで、「学びをつなぐ力」を育成する。

上記の(1)(2)から、目指す子どもの姿を次のように設定しました。

【目指す子どもの姿】
既存の知識や技能とつなげながら「中核的な知識や技能」を獲得し、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚する子ども

2. 2年次研究までの成果

目指す子どもに迫るための働き掛けが明らかになってきたこと

- ① 既存の知識や技能とのずれや憧れを感じさせる問題や事象などを提示する。
→既存の知識や技能がゆさぶられ、子どもは「中核的な知識や技能」にかかわる問いをもつ。
- ② 既存の知識や技能の想起を促す「対象」を提示する。
→子どもは、「対象」との行き来をとおして、既存の知識や技能を想起したり、様々な情報を収集したりする。「対象」の例として、算数における簡単な数値に直

した問題場面、社会における資料などが考えられる。

- ③ 収集した情報の妥当性の判断や重み付けを促す発問などを行う。
→子どもは、収集した情報の中から、必要な情報を判断する。そして、子どもは問いを解決するとともに、既存の知識や技能とつなげながら「中核的な知識や技能」を獲得する。
- ④ 「学びをつなぐ力」を振り返らせる。
→子どもは「学びをつなぐ力」の有用性を自覚し、「学びをつなぐ力」を自分のものにする。

①～④は段階的なものでもなければ、順序性が決まったものでもありません。子どもの素直な思考を想定しながら、働き掛けを構想していくことが重要です。

3. 2年次研究までの課題と3年次研究の重点

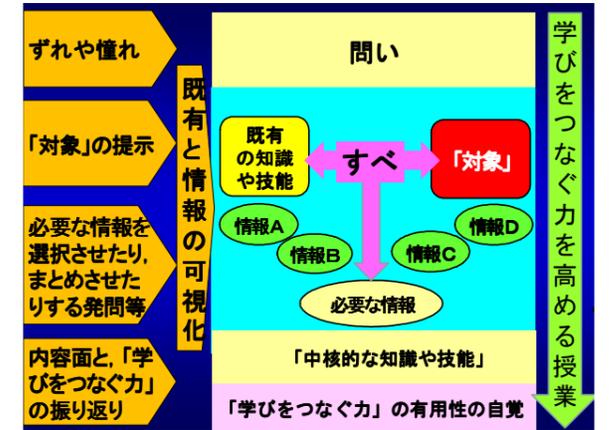
「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けを開発すること

「学びをつなぐ力」を振り返る場面があっても、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することは、子どもにとって困難なことでした。1学期の授業をとおして、「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促すためには、次の働き掛けが大切であることが見えてきました。

- (ア) 道具によって、つなぐべき既存の知識や技能と収集された情報を可視化すること
- (イ) 道具によって「学びをつなぐ力」を促すこと
- (ウ) 「中核的な知識や技能」とともに、「学びをつなぐ力」を振り返らせること

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けも含め、目指す子どもに迫るための

働き掛けは次の図のとおりです。



6年体育「鉄棒運動」を例に説明します。「中核的な技能」は「部位に着目した鉄棒運動のこつ」です。また、「既存の技能」は「自分の動き」です。そして、「学びをつなぐ力」は「関係付けるすべを用いて、自分に適した運動のこつを見いだす力」です。

まず、タブレット端末（道具）により、自分の動き（既存の技能）と、手本となる動き（「対象」）から収集された運動のこつ（情報）が可視化されました。

次に、自分の動きと運動のこつが可視化されることで、子どもは、自分の動きと手本となる動きとを比較し、「腕をまっすぐ伸ばす」「踏み切りで足を曲げる」などの情報を収集しました。

そして、これらの情報を視点に、自分の動きをペアで撮影しながら練習させました。既存の技能と情報が可視化されることで、子どもは複数の情報の中から自分に合う情報を選択しました。

その後、「見付けたこつ」と「こつの見付け方」を振り返る際、子どもは「学びをつなぐ力」の有用性を自覚しました。

このように、道具による可視化によって、「学びをつなぐ力」も促されやすくなります。その上で、「中核的な知識や技能」とともに「学びをつなぐ力」を振り返らせることが、「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促すことに結び付くことが見えてきました。